大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

エチオピア西南部オモ系農耕民ベンチョ：その生業と社会変化についての報告

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-08-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮脇, 幸生 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004761

エチオピア西南部オモ系農耕民ベンチョ

—その生業と社会変化についての報告—

宮　脇　幸　生

はじめに

ベンチョ（Bencho）はエチオピア西南部に住む定着農耕民である。彼らは他の多くのエチオピア西部および西南部の周辺諸民族集団と同様に，かつてのエチオピア帝国における支配民族であったアムハラ（Amhara）からは，「黒人」を意味するシャンキラ（Shankilla）という蔑称で呼ばれている。〔図1〕

言語学上はフレミングにより，アフローアジアティック超系（Afroasiatic Superfamily）の中のオモ系（Omotic Family）に位置づけられ，東部に隣接して分布する定着農耕民シェ（She）とともに，一括してギミラ（Gimira）として分類されている〔Fleming 1976〕。

ベンチョにかんする人類学的な調査は，1974年のエチオピア革命の直前にランゲによってなされている〔Lange 1975〕。ランゲの調査では，ベンチョを含む西部オモ系農耕民（ナオ（Na'o），ツァラ（Tsara），シェ，ベンチョ）の歴史的な移動の過程を，言語および宗教的な象徴物の類似性から類推することに主要な関心が払われており，宗教や伝承についての情報は比較的豊富である。しかし生業形態や社会構造への言及はきわめて少ない。

筆者は1986年11月から1987年2月にかけて，ベンチョの村落のひとつに滞在して，その生業および社会構造について調査をした。本稿の主要な目的は，こ

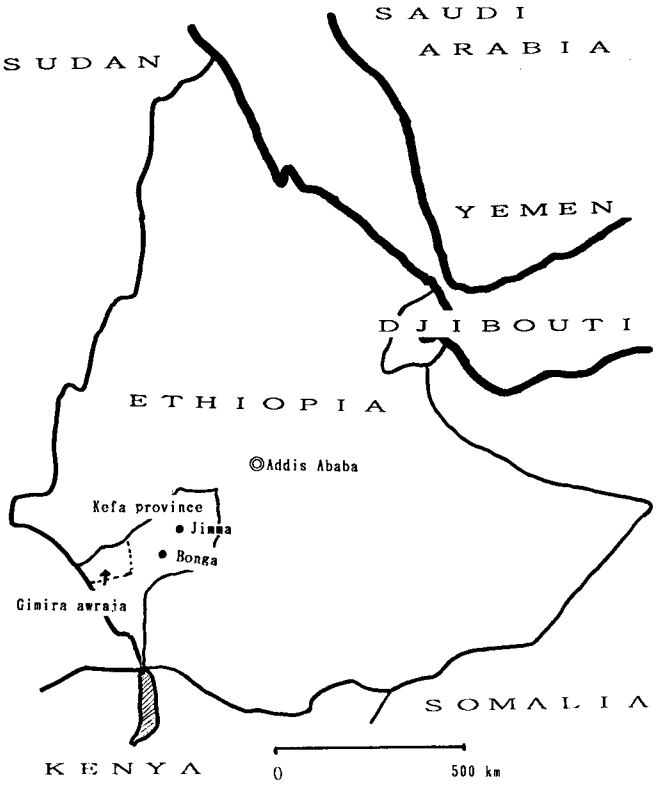


図1

の調査に基づいて，ベンチョの生業形態について新たな情報を呈示することにある。これにより，今まで報告されることのなかったこの民族集団の社会の「下部構造」を記述し，その全体的な理解への一歩としたい。また革命以降の社会変化について言及し，生業形態の在り方と社会変化のかかわりを簡単にではあるが分析し，結びとしたい。

1. 環　　境

ベンチョの居住地域は，北緯7度，東経35度，エチオピアの行政区分で言えば，カファ（Kafa）州ギミラ（Gimira）県（awraja）タマンジャージ（Temenjayazhi）郡（warada）を中心として，西のグラファルダ（Gurrafarda）郡にかけての標高1,000m以上の高地である〔図2〕。居住地域の面積は，約1,200Km²，北西をオモ系農耕民シェコ（Sheko），北をオモ系農耕民メール（Mer），東をオモ系農耕民シェ，南をスルマ系農耕民メニット（Menit）に囲まれている〔図3〕。総人口は100,000人程であると思われる。ベンチョの居住地域を含むカファ州の高地は，エチオピアでもことに湿潤な地域であり，年間降水量は1,500mmから1,800mmにのぼる。（ベンチョの居住地域における月ごとの気温と降水量に関するデータがないので，ここではボンガ〔北緯7度，

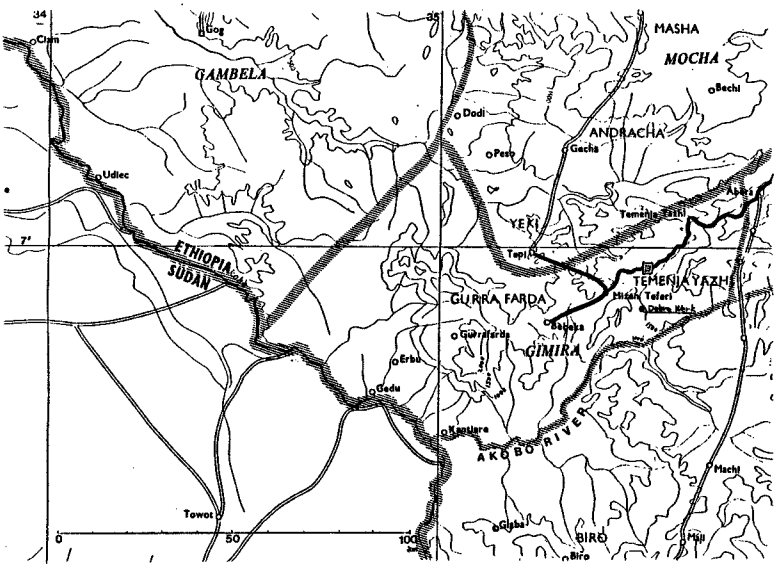


図2

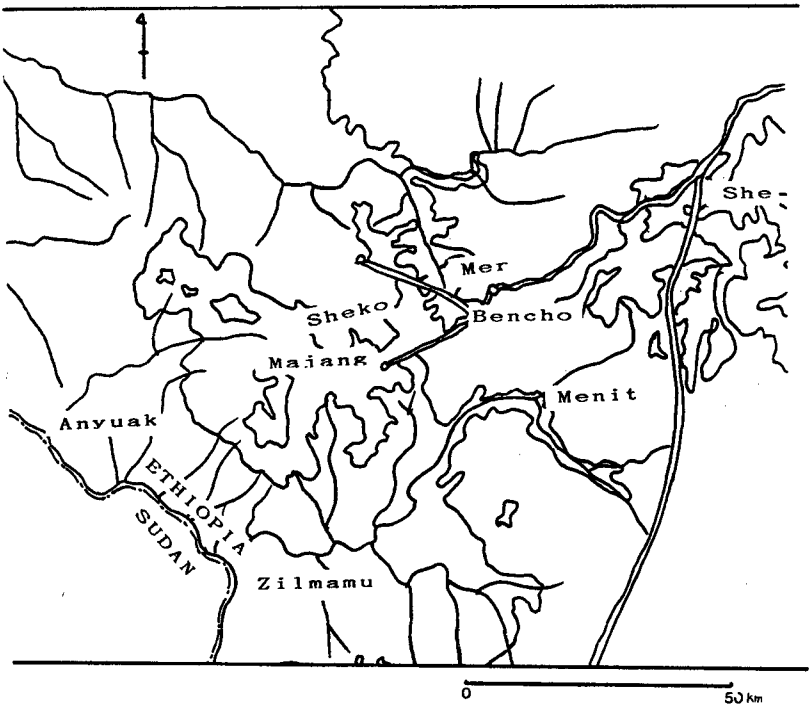


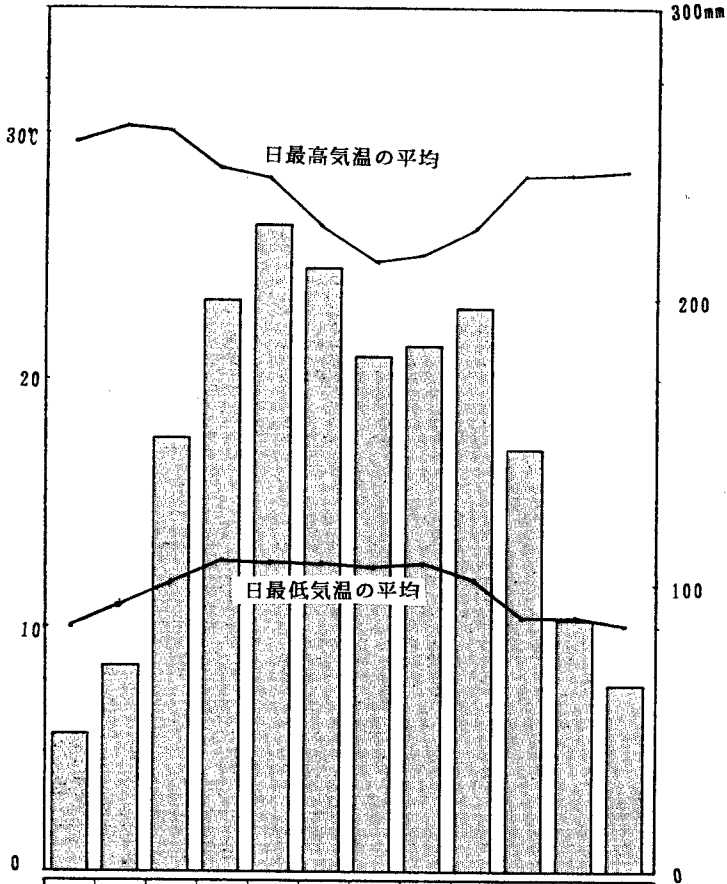
図3

東経36度，標高1,800m〕の計測値をあげておく）〔表1〕。このあたりの一次的な植生は高地林（highland forest）だが〔Daniel Gamaschu 1977〕，現在ベンチョの居住地域では一次林はほとんど伐採されてしまっている。

筆者の調査地は，ギミラ県の中心地ミザンテフェル（Mizan Teferi）の町から南西へ約20kmほどの所にあるゴマル（Gomar）地区（kabale）である。タマンジャージの「農民組合（gabre mahbar）」の統計によると，世帯数449戸，人口2,575人。他の地域と同様に，村落は典型的な散村形態をとっている。ゴマル地区は，北をダチャバス（Dachabas）地区およびミャ（Mya）地区，東をゲリート（Gelit）地区およびコクン（Kokun）地区，西をゼルミ川をはさ

んでゾゾ（Zozo）地区と接している〔図4〕。ミャ地区とダチャバス地区の境には，アムハラの住むデブルウェルク（Debre Werk）という小さな町があり，週に一度マーケットが開かれる。ゴマル地区は南に向かうにつれて高度を

表1　Butzer 1971より作成



月別平均降水量（単位 mm）	Jan.	Feb.	Mar.	Apr.	May	June	July	Aug.	Sept.	Oct.	Nov.	Dec.
	48	72	151	199	225	210	179	183	196	147	88	65

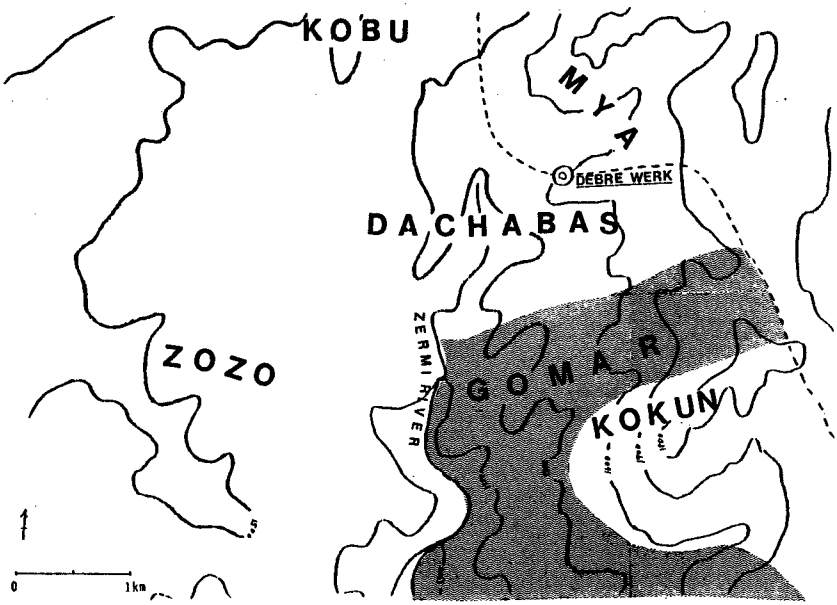


図4

下げ，標高700mあたりを東西に流れるアコボ（Akobo）川を境にして，南のマジ（Maji）県と接する。標高1,300m以下の南部地域には，メニットが住んでいる。南部地域ではまだ多くの自然林があるのにたいして，北部地域ではそれらはほとんど伐採され，畑になっている。調査は主として，ベンチョの居住地域である北部地域で行われた。

2. 社会構造

I. クランと社会成層

ベンチョ社会は父系で外婚単位となる30近いクランを擁するが，これらのクランは通婚の禁忌によって上位と下位の二つのクラン群に分けられる。上位ク

ラン群に属するクランの中でも，バイケス（Baikes）およびマグ（Mag）クランは，後述する「首長」たちの出自クランである。下位クランに属する人々は，上位クランには禁忌とされている野生のシカ（アンテロープの一種？）およびブタ（未同定）の肉を食べると言われている。これらの点を除くと，上位クランと下位クランの間には生業の違いもないし，日常的な接触の忌避も行われておらず，一つの村落内に入り混じって居住している。〔表2〕

これらのクラン群の下に，バンド（Band）と呼ばれるアウトカーストが存在する〔図5，図6〕。バンドは他のベンチョと同様な定着農耕に加えて，男は狩猟を行い，女は陶器の壺や皿を作る。彼らは一般のベンチョの食べないヤマアラシ（未同定）やオナガザルの一種（colobus）を食べると言われている。一般のベンチョとの通婚は行われない。バンドと他のベンチョの間には接触の忌避があり，それぞれが互いの家に入ることは禁じられている。また共にビールを飲む際も器が区別される。バンドの世帯はベンチョの村の外れに数軒固まって居住している。バンド自体の内部に，父系で外婚単位であるクランが7つある。

表2　クランの構成

high clans	*Baikes, Bat, Byak, Ers, Kainkes, Koidad, Koinyab, Komkes, Machikes, *Mag, Mertet, Sar, Shalkes, Tom, Zog
low clans	Amkes, Bamkes, Gamkes, Kornkes, Morkes, Nakes, Shoshinkes, Taskes, Tsatsukes, Zoikes
不明	Kep, Mushikes, Mer, Sob
Band	Daakesband, Gaizkesband, Kababand, Kaashiband, Machikesband, Sharkesband, Shoshikesband

* roral clan

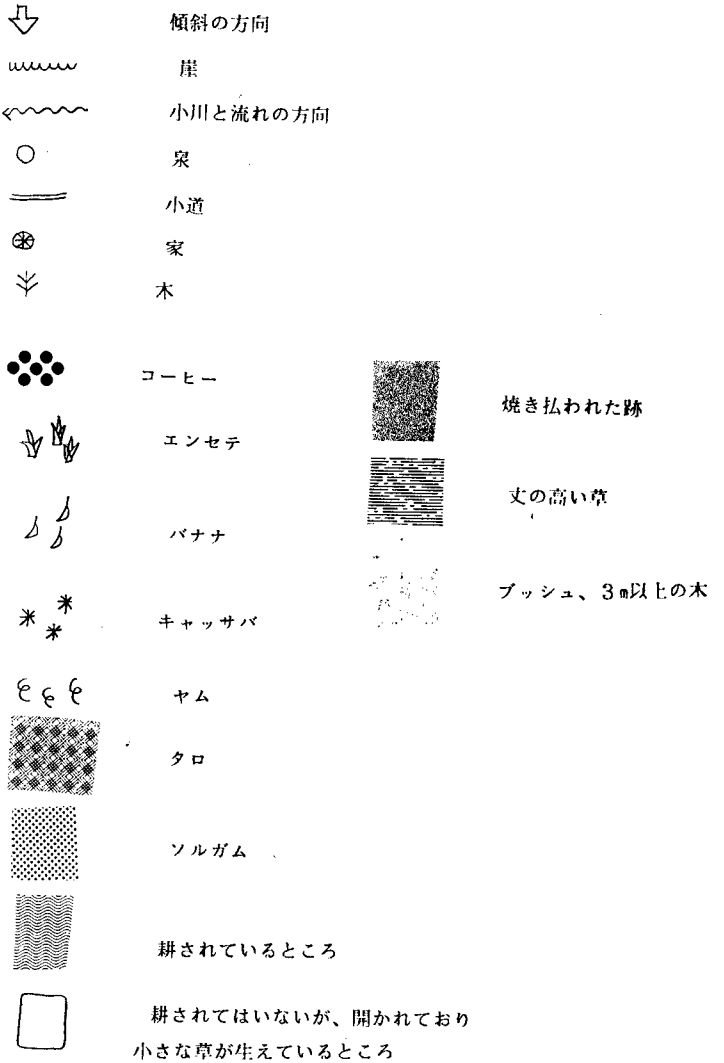
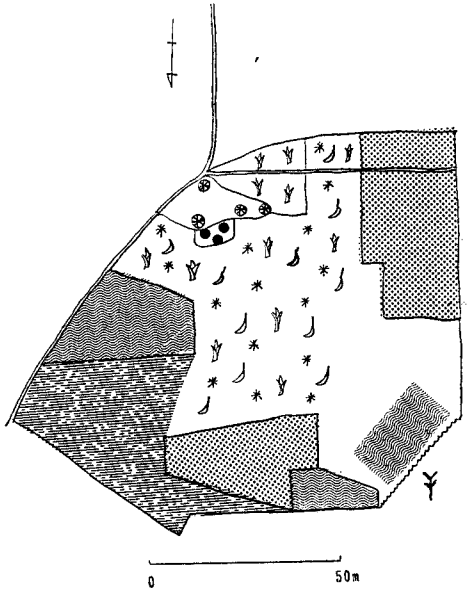


図5　畑の利用についての全体的な考察は第3章でおこなう。



事例番号	5
全(a)	72
コーヒー	1
エンセテ	−
タロ	−
ソルガム	7
その他＊	25
利用率%	45
作付／人	＞ 8.3

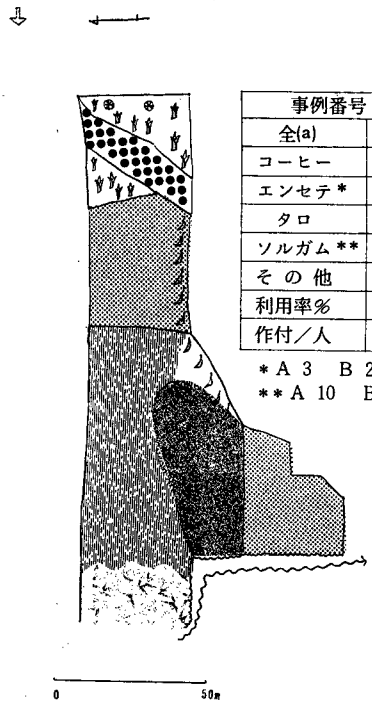
＊エンセテ、バナナ、キャッサバ

図6　バンドの畑の模式図である。左上に見える敷地内の住居には，次の3世帯の家族が居住している。1．インフォーマントであるPとその妻および4人の子供からなる世帯，2．Pの弟であるSとその妻および生後半年の女子からなる世帯，3．Pの弟で未婚のMと，母親が同居している世帯である。上部のソルガムとエンセテの植えてある部分はSとMの共有する畑であり，それ以外はPのものである。この畑の特異な点は，エンセテ，バナナ，キャッサバの混植されている部分が，畑の全利用面積の半分以上にものぼることである。このような混植のパターンは，他のベンチョの人々の畑に見ることはできない。Pは盲目である。だから畑には1年中同じものを与える作物を植えたのだという。Pはこのほかにも，ゾゾ地区に兄と共有のソルガムの畑をもっている。

バンドの狩猟は罠によるものである。男たちが猟に行くのは週に3回であり，ことに水曜と木曜はグレイザーモンキーの断食日にあたっていて，弱っているので捕まえやすいから必ず行くという。けれども1日の猟で捕まえることのできるのはせいぜい1匹である。通常の食生活は畑でとれる農作物に依存している点は，他のベンチョと異ならない。

Ⅱ．世帯の構成

ベンチョの世帯は核家族，あるいは複婚家族である。この世帯が生産および



事例番号	7
全(a)	83
コーヒー	4
エンセテ＊	5.5
タロ	−
ソルガム＊＊	21
その他	−
利用率%	37
作付／人	5.9

＊A 3　B 2.5
＊＊A 10　B 11

図7

インフォーマントの Ch は25才，現在2人の妻をもつ。1回目の結婚は19才のとき。妻の両親に婚資として5頭の雌牛をわたす約束だったが，革命後は婚資として牛をわたすことは禁じられたので，何もわたさなかった。2回目の結婚は22才のときで，このときは妻の両親に50ブルと小さな雌牛をわたした。

模式図の上部に二つの住居がみえる。それぞれの住居に，妻が一人ずつとその子供達が住む。夫はその間を行き来する。これはベンチョの複婚世帯の通常のパターンである。またエンセテ，ソルガムの畑もそれぞれの妻に二分されている（A.第一妻 B.第二妻)。一般に複数の妻がいる場合，畑の配分は次のようにおこなわれる。畑の開墾，除草，耕起，播種は夫および妻たちが共同でおこなう。植えた作物が成長してしばらくすると，夫は不公平のないように妻たちに畑を等分する。それ以降妻たちは，自分の畑の管理に責任をもつ。穀物の収穫がなされるときは，それぞれの畑ごとに共同労働（dab）が組織される。共同労働のさいは妻たちは互いに協力する。

1. 利用率を除いて単位はアール
2. 利用率とは作付面積÷全所有面積
3. 作付面積には既に収穫の終わったトウモロコシの作付面積も含まれる
4. 作付／人とは，作付面積÷家族構成員数
5. 家族構成員にかんしては，14才以下を0.5，15才以上を1として計算

消費の基本単位となっている。ゴマル地区の世帯構成員の平均は5.7人で，地区の全世帯の17パーセントにあたる77世帯が複婚家族である。そのうちの13世帯に3人以上の妻がいる。〔図7〕

ベンチョの少年は11才に成ると自分の家を持ち，父から畑の一部を譲り受け，ヤム，タロ，エンセテの栽培を始める。少年は15才くらいで結婚をする。結婚の相手は少年が自分でみつけることが多いという。先に述べたように，婚姻はクランが外婚単位となっている。同じクランに属す男女が結婚すると，その間に生まれる子供はみな死ぬと信じられている。革命前には婚姻の際に，婚資として5頭前後の雌牛が少年の父親から少女の父親へ支払われた。革命後は婚資として雌牛を支払うことは禁じられ，かわりに現金150ブルを支払うことになっている。

父親が死んだ場合は，畑にあるタロとエンセテは燃やされる。妻は兄弟によってひきとられる。土地や家畜などの財産は，息子たちの間で分割相続される。

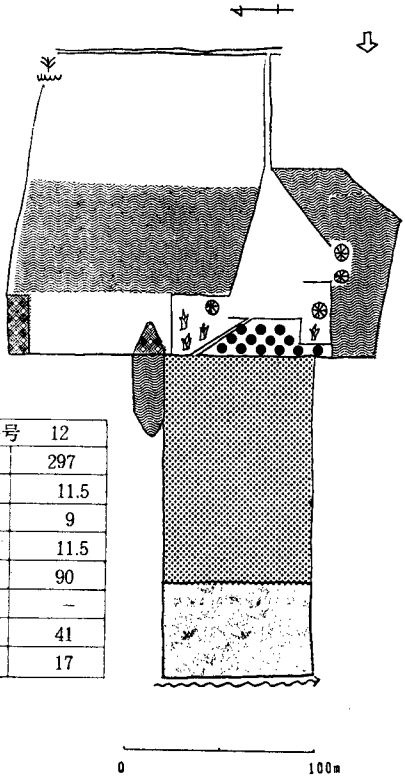
Ⅱ．「首長」とその支配

1974年のエチオピア革命以前には，ベンチョの居住地域には少なくとも5人の土着の「首長」がいた。彼らはエチオピア帝国政府からバラバト(balabbat)という称号を与えられ，それぞれの領地の支配を認められていた。

ベンチョにはミャンゲ（myange）とよばれる霊と，カナンス（kanans）と呼ばれる霊の霊媒が多数おり，それぞれミャンゲ（myange），カ（B. ka/A. kalicha）と呼ばれる。これらの首長はそれぞれの領土内において，最強のミャンゲあるいはカとみなされていた。ミャンゲの霊媒である首長はベンチテアット（Benchiteat）と呼ばれる首長ただ一人であり，他の首長はいずれもカであった。ベンチョ語で tyat とは「王」を意味し，ベンチテアットとは「ベンチョの王」のことである。「ベンチテアット」とは代々継承される称号である

が，現在のベンチテアットの個人名は知られていない。カの霊媒である他の首長たちはコムス（koms）と呼ばれていたという。普通人々はベンチョの王は誰かと聞かれたときには，ベンチテアットと答えるが，実際にはそれぞれの首長の政治的な力は拮抗していたようである。

筆者の滞在したゴマルおよびその周辺の地区は，革命時にはシャシンテット（Shashintet）という首長が統治していた。彼は領土内に七つの宮廷を持ち，多くの従者を従えていたという。また，自分の親族をギャスバブ（gyasbab）という位につけ，領土内の税の徴収や労役の徴発にあたらせた。〔図8〕



事例番号	12
全(a)	297
コーヒー	11.5
エンセテ	9
タロ	11.5
ソルガム	90
その他	–
利用率%	41
作付／人	17

図8

ギャスバブの畑の模式図。インフォーマントBは推定年齢60才。現在2人の妻，5人の子供，1人の孫とともに住む。かつてはほかに3人の妻をもっていたが，2人は死に，1人は逃げた。

Bは下位クランであるアムケスに属しており，政府のギャスバブだった。所有地は他のベンチョに比べて3倍もの広さがある。父がこの土地をバイケスのギャスバブから与えられ，それを受け継ぐ。

5頭の雌牛と1頭の去勢牛を所有しており，この点でも他のベンチョの人々よりも裕福。

右上の耕作地と家は，彼の息子のものである。

革命後は政府の手によって，ベンチテアットを除くすべての首長は処刑され，財産は没収された。ベンチテアットも現在では，表むきは他の農民たちと変わらぬ暮らしをしていると言われている。

Ⅳ．革命後の社会

現在のベンチョ社会は，政治的には「農民組合」によって統制されている。タマンジャージ郡の「農民組合」の本部は，ミザンテフェリの西にあるアマン（Aman）という町におかれている。郡内の各地区には支部がおかれ，税の徴収や争いの調停にあたっている。議長をはじめとする幹部は，地区の人々の合議によって選ばれる。

土着の宗教であるミャンゲおよびカへの信仰は，現在政府によって厳しく弾圧されている。

3．生業形態

Ⅰ．生計活動全般について

ベンチョの人々の生計活動を，ここでは便宜上，世帯を単位とする自給的な生産・消費活動と，世帯を越えた経済的な活動に分けて取り上げる。

ベンチョの人々は，家の周りに1ヘクタール程度の耕作地を持ち，そこで栽培される作物によってほぼ自給的な生活を営んでいる。また家畜として数頭のウシ，ヒツジ，ヤギ，ニワトリを飼育しているが，農耕にくらべるとはるかに低調である。1頭のウシも飼っていない世帯も多い。農耕と牧畜のほかに，アウトカーストであるバンドが罠による狩猟を行っている。けれども実際にはその成果は少なく，生活は他のベンチョと同じく農耕に依存している。農耕活動の詳細は次節において述べる。

世帯を越えた経済的な活動は，大まかに言って，政府やアムハラ商人ともか

かわるマーケットにおける交換と，ベンチョ社会内部での，共同労働における労働の交換・婚姻における女と婚資の交換・日常的な収穫物の交換とに分けて考えることができる（婚姻もここでは広義の経済活動に含めて考える）。前者が貨幣を介した経済活動であるのにたいして，後者では貨幣経済の浸透度が前者に比べて相対的に小さい。

ベンチョの人々の生活において，貨幣経済にかかわる活動の領域は，自給的な生計活動の領域に比べてはるかに小さい。町で農民組合のような政府の機関に勤めたり，ローカルホテルの従業員として働いているごく少数の人々を除くと，大多数のベンチョの日常的な現金収入は，週に一度町で開かれるマーケットでの農作物の販売によっている。換金作物であるコーヒーを除くと，最もしばしば売られるものは，タロ，ヤム，エンセテの根茎部およびその澱粉を醗酵させたもののかたまり，キャベツ，パパイヤ，タバコの葉，穀物から作ったビール（これは日常的にも何軒かの家で女が醸して売る）などである。これらの作物はみな女が各世帯からマーケットへ運び売っている。こうした農作物の販売によって得られる収入は，1回のマーケットで1エチオピアンブル（birr）程度である。これらの作物は各世帯で消費される量に比べてごくわずかであり，売れずに家に持ち帰られることも多い。これらのほかにウシ，ヒツジ，ヤギ，ニワトリなどの家畜が男によって売られるが，数は少ない。ほかにごく少数ではあるが，ハチミツを売る男もいる。これらの農・畜産物が現金収入源としては二次的なものであるのにたいして，コーヒーはもっぱら現金収入の目的で栽培され，ほとんど自家消費されることはない。コーヒーはマーケットで政府によって買い上げられる。これらのほかに，マーケットではバンドの女たちが陶器の壺を売っている。

ベンチョの現金収入の大部分は，年間70ブルの政府への税金の支払いにあてられる。そのほかでは，マーケットでアムハラ商人から購入する衣服が主な支出であるという。マーケットで女たちが農作物を売って得るわずかな現金は，

塩などのベンチョの居住地域では手に入らない日用品の購入にあてられるが，たいていは女についてきてマーケットにたむろしている夫たちの酒代として，その日のうちに町の酒場で使われてしまう。

ベンチョ社会への貨幣経済の浸透が近年強まってきているとはいえ，ベンチョ社会内部における経済活動はマーケットを介した経済活動に比べて，貨幣以外の「もの」の交換による割合が大きい。現在でも畑の持ち主が共同労働を組織したときには，そこで働いた者にはビールが振る舞われるが，現金が支払われることはない。またかっては婚資として牛が支払われていた。(もっとも現在は牛の支払いは禁じられている。それどころかそれにかわる現金を支払うことさえ希である)。また自給用の農作物の不足した世帯は，小家畜との物々交換によって他の世帯から作物を得る（もちろん現金で売買することもある)。

次にベンチョの主たる生業である農耕について述べることにする。

Ⅱ．農耕の形態

a．栽培作物の種類

調査地ゴマルにおいて，インフォーマントが彼らの主な栽培作物としてあげたものは，コーヒー，エンセテ，タロ，ヤム，テフ，オオムギ，ソルガム，トウモロコシ，キャッサバである。エンセテに9種，タロに3種，ヤムに6種，テフに4種，オオムギに2種，ソルガムに4種，トウモロコシに2種それぞれ品種を認識しており，それぞれの品種に方名を与えている。〔表3〕

他にわずかではあるが，カボチャ，ヒョウタン，キャベツ，タバコ，ソラマメ，パパイヤ，バナナ，サトウキビが栽培されている。

次に主要な作物の用途について簡単に記しておく。

・コーヒー

コーヒーは換金作物として栽培されており，自家消費されることは少ない。ベンチョがコーヒーを飲む場合は，エチオピア高地で一般に見られるように煎

表3　栽培作物の品種とその性質，用途

・エンセテ（英 ensete / B. dash）

品種名	性　質・用　途
bos	葉，および葉軸が明るい緑色。成長すると大きくなり，葉が広くなる。成熟に3年かかる。根茎部（kok）を茹でて食べることはない。葉柄部のデンプンと混ぜて醗酵させ，gonchi として食べる。偽茎基部（dois）を茹でて dois として食べる。1本15ブルで売れる。食べ終えるのに，小家族で2週間，大家族で1週間かかる。
derenk	葉，葉軸が緑色。葉柄基部が茶色。成熟に2年。根茎部を茹でて amicho として食べる。gonchi，dois としても食べる。食べるのに小家族で5日，大家族で3日かかる。下痢のときに kok を焼いて食べる。
jol	葉が明るい緑色。葉軸と偽茎基部が赤い。他の性質および用途は derenk と同じ。
yedi	葉と偽茎基部が濃い緑色。葉軸がえび茶色。2～3年で成熟する。1本13～15ブルで売れる。また4本で小さな雌牛と，13本で大きな雌牛と交換される。成熟していないときは dois として食べることができる。成熟後は amicho，gonchi として食べる。
sikobai	葉が明るい緑色。葉軸と葉柄部がえび茶色。性質，用途は derenk と同じ。
kijidash	葉が緑色。葉軸，葉柄部が白に近い緑色。偽茎基部は紫色。性質，用途は derenk と同じ。
tsors	葉の表側は緑色で周辺部が赤い。裏側は赤い。葉軸，葉柄部は赤茶色。性質，用途は derenk と同じ。
udkachi	性質，用途とも derenk と同じ。
kal	amicho として食べる。2年を過ぎると倒れてだめになる。成熟したものは1本7ブルで売れる。
erpuu	小さなバナナのような実をつける。根は茹でても苦くて食べられない。(野生種)

エンセテの場合のみ，葉軸，葉柄，偽茎基部の色は筆者の観察によるもの。他の情報はベンチョのインフォーマントによる。

• タロ (英 taro / B. ijong)

品種名	性質・用途
boka	葉，茎とも緑色。茎は太い。1年で成熟する。最も多産である。茹でたり焼いたりするととてもおいしい。葉も茹でて食べる。種イモも食べられる。
gorsi	葉が緑色，茎は白っぽい。茎は細い。1年で成熟。boka に次いで多産である。イモには血管のような堅い筋があり，茹でてもおいしくない。葉も食用となる。種イモも食べられる。
daluus	葉は緑色，茎は白っぽい。茎が細い。種イモは食べられなくなる。1年で成熟。(他のインフォーマントによると成熟に2年)

• ヤム (英 yam / B. boi)

品種名	性質・用途
banda	焼く，煮る。食用。
wongobai	食用。
torba/or/shapnsen	食用。茎が白い。
shomt	食用。茎が黒い。
chaps	?
inchi boi	(キャッサバ)

• テフ (英 teff / B. gachi)

品種名	性質・用途
sargenya gachiyan	成熟に3カ月。9月に播種，11月に収穫。
kiet	種は赤と白の混合。成熟に2カ月。播種および収穫は，3月～4月，5月～6月，7月～8月の年3回。
chamo	種が赤い。成熟に2カ月。播種および収穫は，3月～4月，7月～8月の年3回。
pungi	丈が短く，種が赤い。成熟に40カ月。年に3回播種，収穫される。播種されるのは雨が降ったときで，時期は不定。

• オオムギ（英 barley / B. gosa）

品種名	性　質・用　途
gosa dar	白い。年2回，3月末～6月，9月～11月に播種および収穫。
gosa ditz	黒い。上に同じ。

• ソルガム（英 sorghum / B. donka）

品　種　名	性　質・用　途
donka pashikel	種が赤い。ビールに用いられる。
dera	丈が短い。ビールに用いられる。
buod	醗酵させ焼いてクレープ状のもの（A. injera / B. bud）にして食べる。
tyantab	ビール用。

• トウモロコシ（英 maize / B. dichi）

品種名	性　質・用　途
dabara	種が白い。6カ月で成熟。
oitos	種は青，赤，白が混じる。4カ月で成熟。

った豆をつき砕いてそれを煮出した液を飲む場合と，葉をトウガラシ（A. barrbari）と共に煮出した液を飲む場合がある（A. chomma）。

あるインフォーマントによれば，ベンチョがコーヒーを栽培し始めたのは，比較的近年のことであるという。コーヒー栽培が開始されたいきさつの概略は次のようなものである。かつてベベカ（Bebeka）やシェコ（Sheko）のあたりには野生のコーヒーが生えていた。1925年頃，3人のギリシャ人がギミラ地方に来て，当時の行政官であったデジャジ・タイエ（Dejazi Taye）から許可を得てベベカでコーヒーを栽培し始めた。これがギミラ地方のコーヒー栽培の嚆矢である。彼らがベベカで始めたコーヒープランテーションは，何度かその所有者を変えながらも，現在の国有プランテーションに至っている。ベンチョ

にコーヒーが導入されたのは，1954年のことである。そのときの行政官であるフィテラリ・アルマイヨ（Fiterari Almayo）が，ギミラのすべてのバラバットのもとの人民は，コーヒー，バナナ，サトウキビを植えるように命令したからである。それ以前はベンチョではコーヒー，バナナ，サトウキビは栽培されていなかった。

コーヒーが導入される以前の換金作物はコロレマ（kororima）であったといわれる。

・エンセテ

地中の根茎部はコク（kok），地上に出た偽茎基部はドイス（dois），それより上の葉柄部はウォス（wos）と呼ばれている。

エンセテの料理法には，次の三つがある。ひとつは根茎部を，茹でるあるいは焼いて食べる場合である。このようにして作られた料理をアムハラ語でアミチョ（amicho）という。もうひとつの方法は，偽茎基部を茹でるあるいは焼いて食べる場合である。できあがった料理は，ベンチョ語では材料となってエンセテの偽茎基部と同様に，ドイスとよばれる（A. amicho）。三つめの方法は，葉柄部からかきとった澱粉を砕いた根茎部と混ぜ，それを5～6日間地中に埋めて醗酵させ，それを取り出して焼く方法である。こうしてできたパンのようなものをゴンチ（gonchi）と呼ぶ（A. kocho）。

エンセテは人の食用にされるほか，汁を多く含んだ葉柄の下部は切り刻んで牛に与えられる。またそこから汁を絞り出して手拭きとして使うこともある。広がった葉の部分は，地面に座る際の敷物として，雨の日には頭から被りかっぱとして，食物の包装用に，またおりたたんでビールを飲むときの容器として用いられる。婚姻の際には，娘の母がエンセテの葉を細かく裂いたものを乾かして，娘のためにベッドの敷物を作る。

・ヤム

煮たり焼いたりして食される。

・タロ

根を煮たり焼いたりして食すほかに，葉を煮て食べる。革命以前は成人男子にとってタロを食べることはタブーとされていた。

・テフ

ビールおよび蒸留酒の材料。また醗酵させたクレープのようなパンにする (B. bud / A. injera)。

・オオムギ

ビールおよび蒸留酒の材料。

・ソルガム

ビール，蒸留酒の材料。穀粒を砕き醗酵させたものを焼きブドウにして，あるいは醗酵させずにそのまま焼いてパン状にして食べる (A. kita)。

・トウモロコシ

ビール，蒸留酒の材料。キタにして食べる。穀粒をそのまま，あるいはキャベツとともに茹でて食べる。

・キャッサバ

ヤムの一種とみなされている。インチボイ (inchi boi) とは「木のヤム」という意味である。根茎を茹でて食べる。他のヤムに比べて筋が多くて味が劣ると言われている。

b. 農耕暦〔表4〕

穀物類については，3月から6月にかけての雨季の初期が端境期にあたる。この時期に人々は，主としてエンセテ，タロ，ヤムなどの根菜類に依存して生活するものと思われる。あるインフォーマントは，雨季には食糧が不足するので羊と交換に他の家からエンセテを得ていると述べた。

c. 畑の利用の実際〔図9〕

フィールドにおいてランダムに選んだ12戸の世帯の耕作地の面積を測定した（期間　1月26日～2月7日)。ベンチョの畑における土地利用について考察

表4　農耕カレンダー

	乾季　雨季　乾季 1　2　3　4　5　6　7　8　9　10　11　12
エンセテ	◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇
タロ	◇◇　◆◆◆ ◆◆
ヤム	◇◇ ◆◆◆
キャッサバ	◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇
テフ	年に1～3回、3～11月
オオムギ	◇◇◇　◆◆◆
ソルガム	◇◇◇　◆◆◆
トウモロコシ	◇◇◇　◆◆◆◆

◇ 播種　◆ 収穫
それぞれの作物は，品種によって少しずつ播種，収穫の時期，成育期間の長さが異なる。

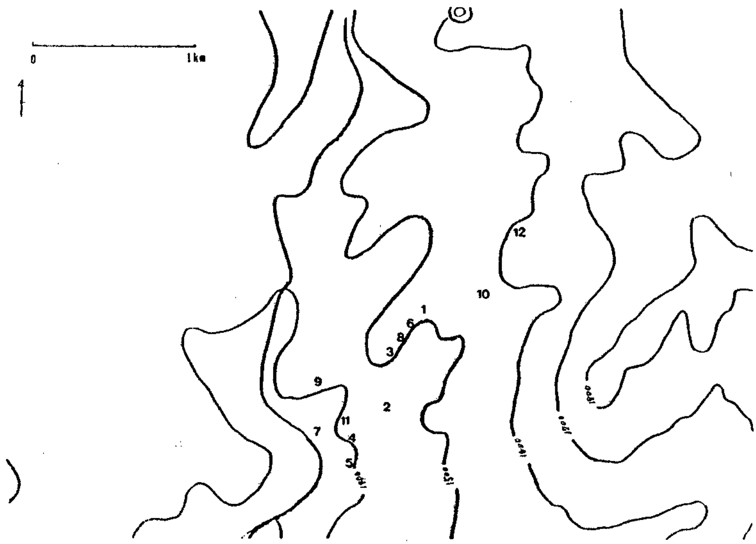
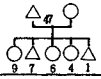
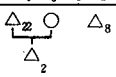
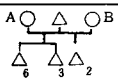
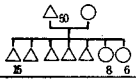
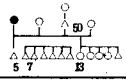
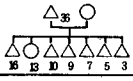
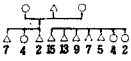
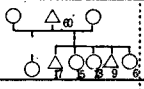


図9　測定した畑の位置。数字は事例番号。

表5

事例番号	家族形態	所有面積	コーヒー	エンセテ	タロ	ルルガム	その他	利用率	作付/人
1		72	1	2.5	4.5 +ヤム	30		53	12.3
2		55		4				55	30
3		63	20	7	5		バナナ 1	66	4.8
4		120	12	7	1	30		50	>13.6
5 band		72	1			7	バナナ 25 エンセテ キャッサバ	45	> 5.6
6		75	2.5	17		11		80	19.2
7		83	4	5.5		21		37	5.9
8		73	21	29				75	5.7
9		116	37	8		7		50	2.2
10		89	19	6.5		4		66	6.7
11		149	1	69	13			56	> 9.6 ?
12 gyasbad		297	11.5	9	11.5	90		41	17
5と12を除く平均		89.5	11.8	15.5					
5と12を含む平均		105.3	10.8	13.7					

するさいに，そのありかたを，(a). 一定の時期において，畑の中にどのような配分で作物を植えているかという共時的な側面と，(b). どのようなオーダーで毎年作物を作り続けているのかという通時的側面に分けて考え，そこから得られるいくつかの知見を以下に述べる。

(a). 共時的側面

調査した12例の畑に栽培されていた品種と，その作付面積については表5，調査時における個々の世帯の畑の利用の模式図は図6～18のとおりである。

すべての世帯に共通して見いだされる作物はエンセテである。作付面積は3a～69a，平均は15.5aである。エンセテは道に面した家屋の側面および背面を取り囲むような形で植えられている。家の周りにエンセテを植えるのは，それが繁っている様子が他の人々の目につきやすいからである。エンセテが充分に繁っていなければ，その畑の持ち主は怠け者であるとみなされる。

あるインフォーマントによると，エンセテは普通タロと混植されるという。タロは1年で収穫され，収穫後に放置された茎や葉が肥料となる。またその間は除草する必要もない。それにたいしてエンセテのみを植える者は少なくとも年に3回の除草をせねばならないというけれども調査事例中エンセテがタロと混植されている事例は1例もない。

コーヒーは12例中11例で栽培されている。コーヒーもエンセテと同じく家屋の周辺に植えられている。

調査期間中はソルガムの収穫期にあたっており，8例で栽培されていた。ソルガムを栽培していない4例においてもトウモロコシを栽培し，それがすでに収穫されていた。ソルガムおよびトウモロコシの収穫後はしばらく牛が放たれ，その後残った茎が焼き払われる。

すでに述べたように，コーヒーはマーケットで売られ，現金収入をもたらす。この中から彼らは税金を払い，さらにマーケットでアムハラ商人から服やその他の日用品を買う。一方エンセテ，タロは年間を通して収穫可能な作物で

ある。これらの作物は，ことに穀物類の端境期にあたる雨季の初期に，人々の食生活に大きな比重を占めているものと思われる。ソルガムやトウモロコシは，そのまま茹でたり，あるいは加工して食卓に供されるだけでなく，ビールの原料ともなる。各家庭で作られるビールは，ベンチョの人々に社交の場を提供するほかに，穀物の収穫時に組織される共同労働（dab）の際や，結婚式，葬式の際にふるまわれる。ビールは，ベンチョの人々の社会的な結合の場に欠かせないものである。

このように，ベンチョの人々の畑の共時的利用をみるならば，ひとつひとつの世帯がそれぞれの耕作地の中に，ベンチョ社会の外部とかかわる貨幣経済の領域に対応する部分，ベンチョ社会内部での世帯間の経済活動の領域に対応する部分，世帯内での自給的な生産・消費活動に対応する部分を備えていることが明らかであろう。

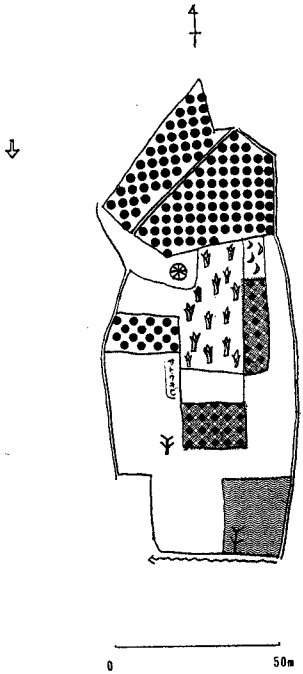
(b). 通時的側面

それぞれの事例において，3年から6年の間に，どのような順で作物を植えてきたかという通時的な土地利用のありかたについてたずねた。

同じ場所に同じ作物を連作するという事例は多くない。つまり，年ごとに栽培する作物の種類を変えているのである〔図10，表6〕。作物の植え付けのオーダーに関する一定のきまりをあげたインフォーマントは一人だけであり，さらにそれも，彼の畑の利用の実態とは一致していない〔図11，表7〕。他のインフォーマントは作物の植え付けに一定のオーダーがあることは否定するが，作物を変えることによって収量が高くなるということについては，共通した認識があった。まただいたい5年に1年は，土地を家畜の牧草地とし，休耕している〔図12，表8〕。

(c). 作付面積と世帯生計の維持

各世帯の所有する耕作地の面積は55aから297aである。これらを平均すれば，各世帯あたり約107aの耕作地をもっていることになる。またこの中から



事例番号	3
全(a)	63
コーヒー	20
エンセテ	7
タロ	5
ソルガム	−
その他	バナナ1
利用率%	66
作付／人	4.8

図10

インフォーマントTは47才。妻と5人の子供がいる。両親が幼いころ死んだので，彼はシャシンテットに引き取られて育てられた。結婚時の婚資の牛5頭はシャシンテットが払った。土地もシャシンテットが与えた。畑を手に入れて18年になる。

現在畑からとれる作物のみでは，家族を養うのには充分ではない。ことに雨季には食糧が不足するので，ヒツジと交換してエンセテを手に入れている。1頭のヒツジで2～4本のエンセテが手に入る。

表6　土地利用のオーダー〔事例番号　3〕

	A	B	C*	D
82	ソルガム	休耕	森	ソルガム
83	オオムギ	タロ，トウモロコシ	休耕	休耕
84	休耕	休耕	トウモロコシ	オオムギ
85	休耕	トウモロコシ	休耕	トウモロコシ
86	タロ，ヤム	オオムギ	トウモロコシ	トウモロコシ
87	タロ，エンセテ(予)	タロ，ヤム(予)	バナナ(予)	タロ

＊土地が痩せているので，余り作物を栽培しない

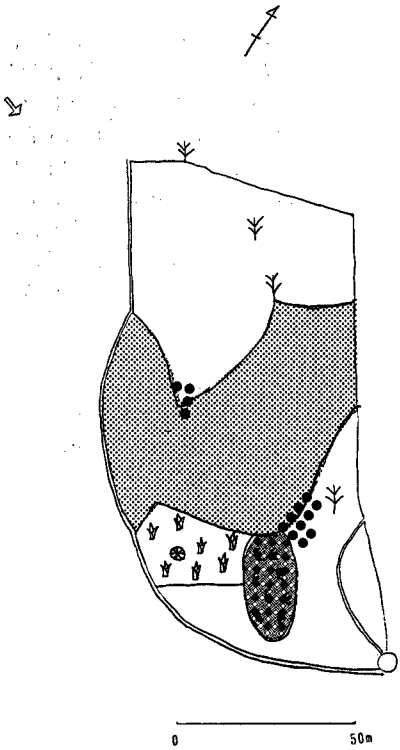


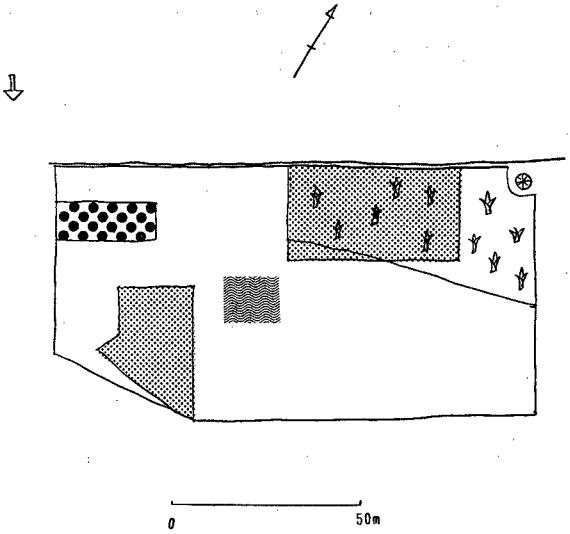
図11

Gは30才。妻と2人の子供がいる。彼は年ごとの作物のオーダーについて次のように語った。1年目ソルガム，2年目トウモロコシ，3年目オオムギ，4年目タロ，5年目放牧。けれどもこれは，彼自身のおこなっている実際の土地利用とは一致していない。

事例番号	1
全(a)	72
コーヒー	1
エンセテ	2.5
タロ	4.5 (タロヤム)
ソルガム	30
その他	−
利用率%	53
作付／人	12.3

表7　土地利用のオーダー〔事例番号　1〕

	A	B	C	D
85	ソルガム	テフ／タロ	エンセテ，タロ	トウモロコシ
86	テフ	トウモロコシ	エンセテ，タロ	ソルガム
87	休耕	ソルガム	タロ，ヤム	休耕



事例番号	6
全(a)	75
コーヒー	2.5
エンセテ	17
タロ	−
ソルガム	11
その他	−
利用率%	80
作付／人	19.2

図12

Kは22才。妻，子供，妻のおじの子供との4人で暮らす。彼の土地利用はインテンシヴであり，1年の内に同一の場所にトウモロコシとソルガムを植えている。土地がここしかないので，1年中作物が取れるようにしているという。このような過激な土地利用の例は，調査事例中この事例のみである。

表8　土地利用のオーダー〔事例番号　6〕

	A	B	C
85	エンセテ，タロ トウモロコシ	エンセテ，タロ トウモロコシ	テフ トウモロコシ
86	トウモロコシ，タロ エンセテ，ソルガム	トウモロコシ，タロ エンセテ，ソルガム	ソルガム トウモロコシ
87	ソルガム	ソルガム	タロ(予)

かつて「首長」のもとで徴税をしていたギャスバブと，アウトカーストで狩猟を行っているバンドの耕作地を除外して平均をとれば約90aである。

各々の耕作地の利用率（作付面積÷所有面積）は37%から75%であり，そのうち半数の6例が50%台である。

どのくらいの面積に作付けをすれば，一つの世帯が年間を通じて自給的に暮らして行けるのだろうか。このことについては充分なデータがないので正確なことは言えないが，次に暫定的な計算結果を示してみよう。コーヒーを除く他の作物の作付面積を，世帯の構成人数で割ってみる。作付面積は，実際に計測した作物の作付面積に加え，その時点からさかのぼった1年の農耕サイクル内に植えられていた作物の推定作付面積も含む。また15才以下の構成員を0.5，それ以上の年齢の構成員を1として計算する。この大まかな計算から言えるのは，次のことである。

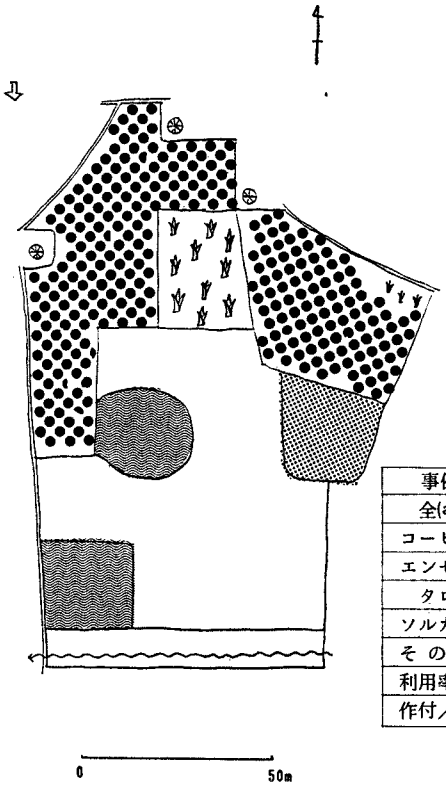
1. 全事例中半数の6世帯が，家族構成員一人あたりの作付面積が10a以下であり，そのうち5世帯が現在の収穫だけでは家族を養うのは苦しいと述べている。

2. 極端に作付面積の少ない事例（事例番号9，2.2a）は他に比べてコーヒーの栽培面積が大きい。またこの事例のみ世帯主がコーヒープランテーションに賃労働に出ていた。〔図13〕

3. 逆に極端に作付面積の大きいのは，16才の少年の単身世帯であり〔図14〕，明らかに余剰生産をしているものと思われる。この少年は余った収穫物をマーケットで売って，婚資のための牛を手に入れるつもりであるという。

仮に世帯の生計の維持が可能である消費者一人あたりの作付面積を5～10aとみなせば，ベンチョの人々はおおむね世帯の生計の維持が可能であるレヴェルにあわせて耕作をしているといえるのではないだろうか。この考察が正しいとしたなら，逆に自らの世帯の自給のレヴェルを明らかに越える余剰生産を行

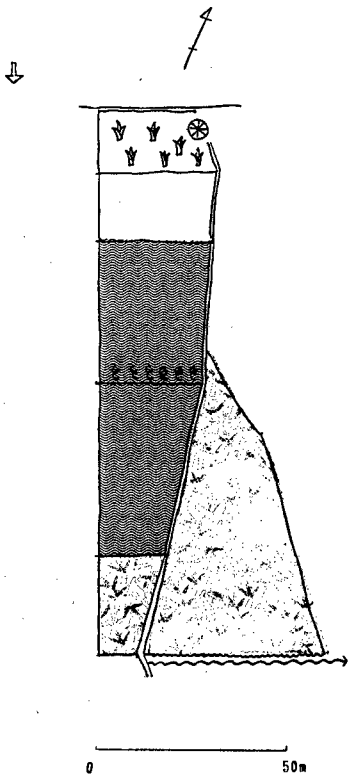
っている事例が興味を引く。すでに述べたように，事例2の少年は，婚資を用意するために明らかな余剰生産を行っているのである。



事例番号	9
全(a)	116
コーヒー	37
エンセテ	8
タロ	—
ソルガム	7
その他	—
利用率%	50
作付／人	2.2

図13

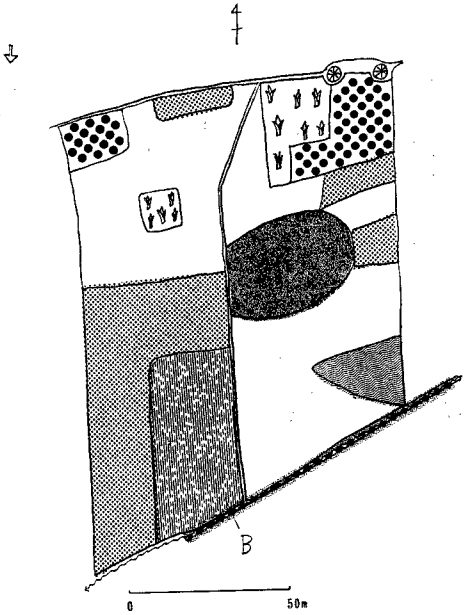
Sは50才。2人の妻を含む総勢16人の大所帯の主人。家族構成員1人あたりのコーヒーを除く作物の作付面積は約2aで，調査事例中最も少ない。逆にコーヒーの作付面積は37aで，他の世帯の平均の3倍以上。コーヒーは現金に換算して1年間に1000ブルの収入をもたらす。また年に2カ月ベベカのコーヒープランテイションで賃労働に従事する。コーヒーを除く作物の収穫は家族を養うのに充分ではなく，近隣の家からエンセテ，タロ，トウモロコシを年に200ブルほど買う。また雌牛をエンセテと交換することもある。



14図

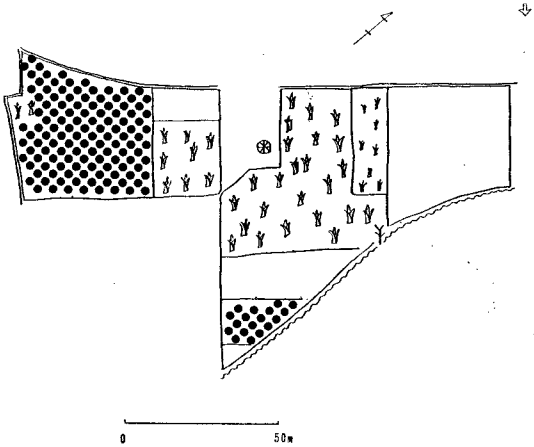
Kは16才の少年で，一度結婚したが妻に逃げられた。土地は父の死後，兄と分割して相続。家族構成員あたりの作付面積は30aで，調査事例中最も多い。Kは他のベンチョの人々の自給的な農耕活動と比べて，明らかな余剰生産を行っている。一般に少年たちは余剰生産物をマーケットで売り，子羊を購入する。その子羊を飼育してマーケットで売り，子牛を買う。そのようにして徐々に家畜を増やして婚姻のための婚資を蓄えるという。

事例番号	2
全(a)	55
コーヒー	1
エンセテ	4
タロ	−
ソルガム	−
その他	−
利用率%	55
作付／人	30



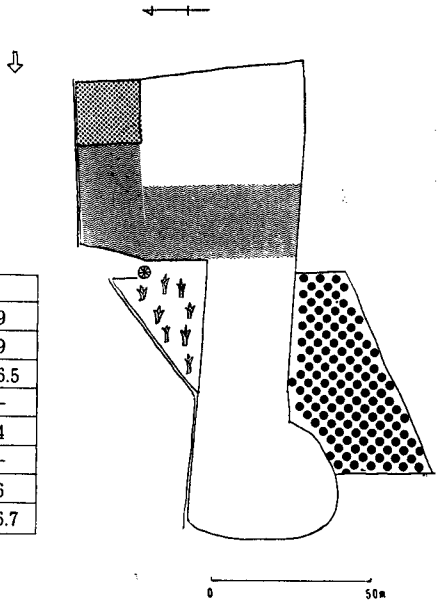
事例番号	4
全(a)	120
コーヒー	12
エンセテ	7
タロ	1
ソルガム	30
その他	−
利用率%	50
作付／人	＞13.6

図15



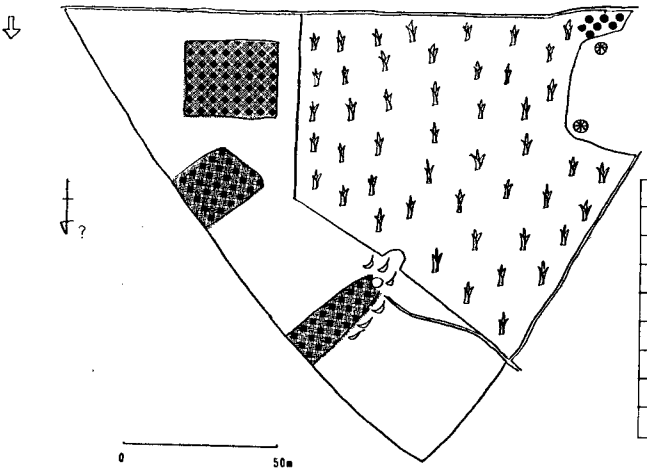
事例番号	8
全(a)	73
コーヒー	21
エンセテ	29
タロ	−
ソルガム	−
その他	−
利用率%	75
作付／人	5.7

図16



事例番号	10
全(a)	89
コーヒー	19
エンセテ	6.5
タロ	−
ソルガム	4
その他	−
利用率%	66
作付／人	6.7

図17



事例番号	11
全(a)	149
コーヒー	1
エンセテ	69
タロ	13
ソルガム	−
その他	−
利用率%	56 ?
作付／人	＞9.6 ?

図18

4. 食　　事

デブルウェルクの小学校の協力を得て，ベンチョの生徒の世帯の食事の調査をした。生徒にノートを与えて，それに1日のうちに家庭でとった食事の内容を記入してもらった。(期間1987年1月30日～2月7日 世帯数4，食事の延べ回数107)。

延べ107回の食事の中で，最もよく用いられる材料はタロである。52回（49%）の食事に登場する。次いでよく用いられるのはソルガム，トウモロコシなどの穀類であり，48回（45%）の食事に現れる。エンセテはわずか12回(11%)の食事に用いられているにすぎない。また牛の肉，乳，ニワトリの卵などの畜産品は32回（30%）の食事に用いられている。〔表9〕

表9　ベンチョの食事の材料構成a

	朝	昼	夜	計	出現率(%) b
エンセテ	5	4	3	12	11
根菜類　c	20(19)	19(19)	15(14)	54(52)	50(49)
穀物類　d	14	14	20	48	45
畜産物　e	8	8	16	32	30
その他　f	21	15	8	44	／

a　1回の食事に現れるカテゴリー別の材料を1点として計算。1回の食事に同一カテゴリーに属する異なった材料が同時に用いられた場合（例えばタロとヤムなど）は，あわせて1点とする。

b　点数の合計を170回で割った。

c　タロとヤム。(　) 内はタロのみ。

d　トウモロコシとソルガムのほか，ビールおよびパン（A. kita）も穀物類とし，1点として計算した。

e　肉，バター，チーズ，醗酵乳，鶏卵。

f　コーヒー，パルパリ，バナナ，キャベツなど。

耕作地の調査結果と照らし合わせてみると，すべての世帯で栽培されていたエンセテの利用回数が少ないこと，相対的に栽培面積の少ないタロの利用回数が多いことが以外に思われる。調査時はソルガムの収穫期であったが，穀物の端境期である雨季には，エンセテの利用回数は多くなるものと思われる。

現在では一般的に，食物についての禁忌はみられない。けれども革命以前は，結婚した男子はタロとカボチャを食べることはタブーとされていた。またニワトリの卵は，結婚前の女子のみが食べることを許されていた。

また“カ”の霊媒には，ヒツジの肉，ヤギの肉，キャベツを食べることがタブーとされていた。

5. 労働・農具

I. 労　　働

労働は，各世帯単位で行うもの，いくつかの世帯が共同で行うもの，個人的にとりむすばれる互助的な労働仲間がある。〔表10〕

労働には性による分業がみられる。こうした分業は慣行的なものであり，それに従わなかった場合にも超自然的なサンクションが下るようなことはない。けれども女のすべき仕事を男がしたら，その男は他者から低くみられるという。

a. 世帯内労働

日常的な労働はほとんど世帯内の労働力によってまかなわれる。男性の労働にくらべて女性の労働の占める割合が大きい。

b. 共同労働

家の建築，耕作地の開拓，穀物の収穫はいくつかの世帯が協力して行う。この共同労働をベンチョはダブ（dab）と呼ぶ。ダブの組織者はダブにさきだち，ダブに集まる者にふるまうビールを用意する。このビールは妻が作る場合もあ

るが，他の家から買う場合もある。

表11から明らかなように，現在のダブは，ダブの組織者（たとえば収穫が行われる畑の所有者）とその妻のほかに，彼と近い血縁関係にある者（兄弟，親あるいは息子）とその妻，および隣人とその妻からなる10人から20人程の人々

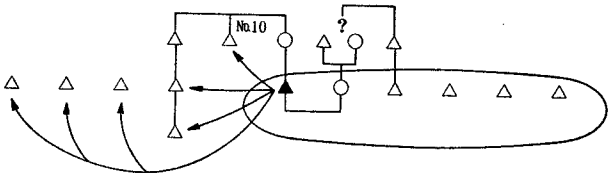
表10　労働

	男	女
農耕牧畜	畑の開墾* 畑の耕起一般** 穀類の播種 ヤムの植えつけ 穀類の収穫，運搬* タロの収穫 コーヒーの収穫 家畜の世話	エンセテ，タロの植えつけ 畑の除草（毎日） タロの運搬 エンセテの収穫，加工**，運搬 ヤムの収穫，運搬 穀物，コーヒーの脱穀
物の製作	家を作る* 工具，家具の製作	家の内装，外装 （壁に模様を描く，床に牛糞を塗る）
マーケット	マーケットでコーヒーを売る	マーケットへコーヒーを運ぶ マーケットでタロ，ヤムなどを売り，肉を買う
日常の労働		ビールを作る** 食事を作る まきを集める 水を運ぶ

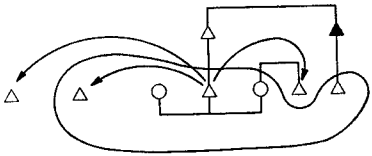
*　ダブによって行われる労働
**　バジによって行われる場合のある労働

表11

事例番号6

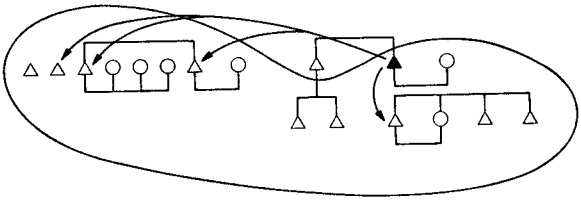


事例番号7

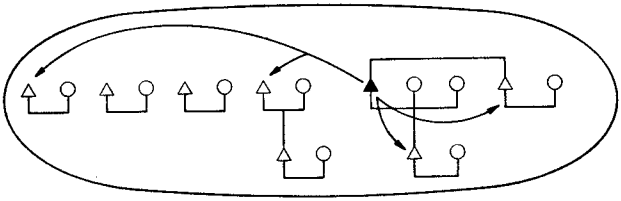


Dab.Baj

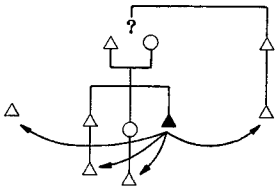
事例番号8



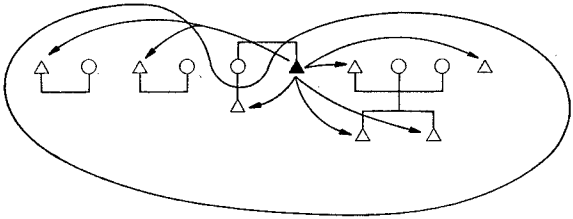
事例番号9



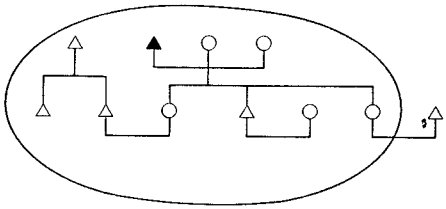
事例番号10



事例番号11



事例番号12



*　▲ダブの組織者
**　実線の範囲内がダブへの参加者
***　矢印は，組織者が参加した他のダブの組織者を示す

によって構成される。ただし革命以前は，姻族も含むより大規模なダブが行われていたと言われる。

c. 労働仲間

バジ（baj）　若者が個人的にとりむすぶ互助的な労働仲間。畑を耕起するさいに行われる。畑の所有者は少量のビール，あるいはコーヒーや朝食をふるまう。

シャン（shan）　犂耕がベンチョに導入されたのは比較的近年のことであるという。ベンチョでは犂耕は2頭の去勢牛によって行われる。しかし一つの世帯が2頭の去勢牛をもっていることはベンチョではまれである。だから犂耕を行う場合は，世帯間で去勢牛の貸し借りがなされる。この去勢牛の貸し借りの関係をシャンという。去勢牛は原則として，一方が6日貸したら次は他方が6日貸すというように，同じ日数だけ相互に貸し借りされる。

Ⅱ. 農　　具

ベンチョの人々が農耕活動に用いる道具は，いたってシンプルである。土地の耕起にさいしては，多くはクワが用いられるが，これはマーケットでアムハラ商人によって売られているものである。また近年犂耕が導入されたのは，先に述べたとおりである。収穫にさいしては，ガジェラ（gajera）とよばれる刃渡り40センチほどの山刀が用いられるが，これもマーケットで売られているものである。（デブルウェルクのマーケットでは，イギリス製のものが売られていた）。ガジェラは多目的な道具であり，穀物の収穫時のみだけでなく，エンセ

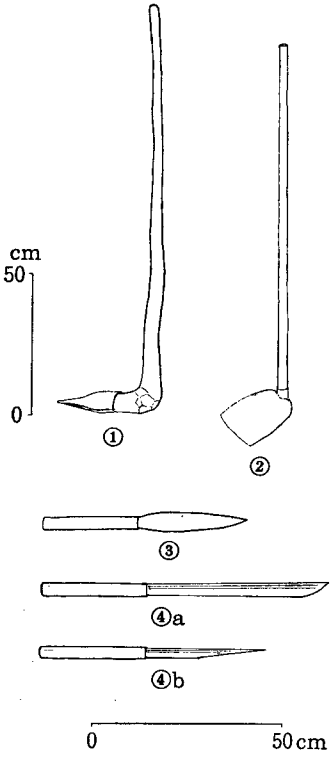


図18

1. ベンチョの伝統的なクワ
   現在ではほとんど用いられない。

2. 現在用いられている外来のクワ

3. ゾム（zom）
   伝統的な草刈り用の大ぶりのナイフ。イタリア戦争（第2次世界大戦）頃まで用いられた。

4. ガジェラ（gajera）
   多目的農具。ベンチョの人々はいったんガジェラを購入するとくりかえし刃を研いで用いる。そのため長期の間に刃の先端部がけずられてだんだん後退し，bのような形になる。

テの収穫，灌木の伐採，除草など，農耕活動においておよそ何かを「切る」さいには，ほとんどこの道具ひとつですまされる。またイモ類を掘り出す場合や，エンセテのデンプンを掻き出す場合にも用いられる。このように，現在ではベンチョの伝統的な農具の大半は，アムハラの侵入以降にもたらされた外来の農具にとってかわられている。〔図19〕

6. 「家族制生産様式」と社会の離散
—革命後の社会変化—

本章では，1974年の革命以前のベンチョ社会の社会構造と，革命以降の社会変容について報告する。次いで，これまでに述べてきたベンチョの生業の様式が，マーシャル・サーリンズによって呈示された「家族制生産様式」の概念にあてはまるものであることを示す。最後に「家族制生産様式」という概念の枠組みを通してベンチョの生業様式を見ることによって，革命以降のベンチョ社会の変容を説明できることを示唆し，本稿の結びとしたい。

革命以前のベンチョ社会は，強力な「首長」たちによって統制された首長制社会であった。彼らはエチオピア帝国政府からバラバトという称号を与えられ，帝国政府の間接支配下におかれていたのだが，その領土内では独自の統治機構をもち，相対的に独立した社会システムを形成していた。

「首長」のもとには，彼の男系親族であるギャスバブとよばれる人々がおり，税や労役の徴発にあたった。首長制の経済的な基盤は，a.一般のベンチョの民衆から「首長」に収められる税金および労役，b.「首長」による婚資の統制，c.宗教的職能者である“カ”としての「首長」への供犠獣の奉納によって支えられていた。この中でも社会の統合装置として興味深いものは，「首長」による婚資の統制である。

婚資の統制は，分析上二つのタイプに分類できる。一つは搾取型の統制である。これは一般的なタイプであり，夫が妻の両親に，結婚後1年以内に婚資と

して平均6頭程度の雌牛を支払うのだが，そのうちの1頭は必ず「首長」に捧げられた。婚資の支払われない場合は，妻の両親が「首長」に訴え，「首長」は夫を捕らえて強制的に支払わせた。もう一つのタイプは再分配型の統制である。若者に身寄りがなく，婚資を支払う力のない場合は，「若者が自分の領土から他の首長の領土に行ってしまわないために」，「首長」が若者に婚資として牛を3頭与えた。そのかわり若者は「首長」のもとで1年間労働奉仕をした。さらに若者の夫婦に娘が生まれると，その娘の結婚時の婚資は「首長」のものとなり，そのうちの1頭が夫婦に返された。また息子の場合は「首長」の従者となり，宮廷で働いた。彼の婚資の一部は「首長」が負担した。

婚資の制度は二つの側面で社会の統合に寄与していたと思われる。一つは再分配型の統制にみられる「首長」と一般のベンチョの民衆間の結合，もう一つは女性と牛の交換を媒介にした姻族間の結合である。女性と牛の交換によって媒介された姻族間の結合はさらに，共同労働であるダブの構成にも反映していた。革命以前のダブは，姻族も参加する大規模なものだったといわれる。

革命以前のベンチョ社会が，「首長」を中心とした婚資の流れによる統合によって特徴づけられるとするならば，革命以降のベンチョ社会は「首長」という中心を失い，内在的な統合装置を欠いた離散的な状態によって特徴づけられる。ここで革命以前と革命以降の婚資の支払い状況をみてみよう。

表12は10人のインフォーマントから聞き取った婚資の支払いの事例をまとめたものである。37例の婚姻のうち，25例が革命前，12例が革命後になされたものと考えられる。革命以前の事例では，3例において婚資が支払われていない。婚資を支払わなかった事例のうち，ひとつは婚姻の直後に妻が死亡しており，もうひとつはレヴィレート婚である。いずれの場合もベンチョでは，婚資を支払わぬことが不当であるとはみなされていない。三つめの事例では，インフォーマントは妻をカファから得ている。彼によればカファには婚資の慣習がなかったという。これらの事例を除けば，革命以前にはいずれも2頭から9頭

表12　婚資の支払い状況

	年　代	続柄		婚資の内容	備　　考
3	1976？	本人	→	5頭の雌牛	Shashintet が5頭とも負担
4	1975	本人	→	0	姻戚とのつきあいなし
6	革命後	本人	→	500birr	2頭の雌牛を売った
7	1981	本人	→	着物のみ	
	1983	〃	→	50birr と小さな雌牛	
8	1957	本人	→	5頭の雌牛	Shashintet が3頭負担
		〃	→	0	妻が結婚1ケ月で死亡。子供がなかったので払わず。
	1976？	〃	→	8頭の雌牛	Shashintet 5頭 本人3頭
	1982	娘	←	0	恋愛
	1983	〃	←	0	
	1984	息子	→	0	子供ができたので150birr払う予定
9	革命前	本人	→	7頭の雌牛	
	〃	〃	→	5頭の雌牛	
	〃	〃	→	0	兄の妻を引き取る
	1984	娘	←	0	F.A.に提訴
	1985	息子	→	100birr	将来50birr 払う約束
10	1969	本人	→	0	妻はKafa 出身婚資の慣習なし
11	1971	本人	→	7頭の雌牛	
	1975	〃	→	7頭の雌牛	
12	1942	本人	→	9頭の雌牛	
	1951	〃	→	6頭の雌牛	
	1957	娘	←	6頭の雌牛	
	1959	娘	←	3頭の雌牛	
	1962	娘	←	4頭の雌牛	
	1964	娘	←	5頭の雌牛	
	1967	娘	←	2頭の雌牛	
	1978	娘	←	0	
	1980	息子	→	5頭の雌牛	
	1986	娘	←	2頭の雌牛	

表12（続）　婚資の支払い状況

	年　代	続柄		婚資の内容	備　　考
一	1940前	本人	→	7頭の雌牛	
	1950頃	〃	→	7頭の雌牛	
	革命前	娘	←	7頭の雌牛	
	〃	娘	←	7頭の雌牛	
	〃	娘	←	7頭の雌牛	
	〃	息子	→	7頭の雌牛	
	〃	息子	→	7頭の雌牛	
	〃	息子	→	7頭の雌牛	

の牛が支払われている。

これにたいして革命以降の事例では，12例中6例において何も婚資として支払われていない。それ以外の事例でも支払われた婚資はわずかであり，革命以前の内容に匹敵するのは1例のみ（5頭の雌牛）である。またこうした状況が姻族間の対立をまねいているのは，すでに述べたとおりである。

革命以降婚資に関しては，牛での支払いは禁じられ，かわって現金150ブルを支払うことと定められている。（ちなみに成熟した雌牛はマーケットで400ブル程度で売買される）。インフォーマントたちは自分が革命後の婚姻において婚資を払わなかった理由として，しばしばこの「法」に言及する。けれどもそれが事後的な正当化であるのは，多くの場合条例の規定する150ブルさえ払われていないことからも明らかである。むしろ革命後の婚資の慣習にみられる急激な変化は，交換の中心として機能していた「首長」の不在の結果とみなされるべきだろう。

革命後に変化したものとしてさらに，共同労働ダブの組織をあげることができる。現在の共同労働は，隣人および親子，兄弟等の非常に狭い血縁関係に基づいた小規模なものである。姻族が共同労働に参加するのは非常に希である。けれども革命以前は姻戚関係は非常に強かったという。共同労働のさいには多量のビールを醸してそれぞれの娘の夫にメッセージを送った。すると夫たちは

隣人を10人以上も連れてやって来たのだという。

こうした共同労働の規模の縮小は，婚資の慣習の衰退と無関係ではない。このことは，婚資がわたされなかった場合に，姻族間に次のような禁忌が生ずることからも明らかである。

婚資の交換がなされない場合，夫と妻がたの両親は互いに直視することができない。もしどちらかが他方を直視すれば，見られたほうは病気になるといわれる。これを直すには，見たほうが見られて病気になったほうに羊を贈らねばならない。その羊の尿で痛む部分を洗えば，病気は直る。

また婚資がわたされない場合は，夫は妻の兄弟の畑へ行くことはできない。

このように，「首長」という中心を欠くことによって容易に崩壊してしまったベンチョの伝統的社会の社会構造は，その根底にある生産のありかたをサーリンズの呈示した「家族制生産様式」の枠組みからみることによって，よりよく理解できるように思われる。

サーリンズによれば「家族制生産様式」は「過少生産」によって特徴づけられる。すなわち「家族制生産様式」においては，生産資源は過少利用され，労働力も過少利用されるのである。これは裏を返せば，潜在的な余剰生産力を秘めているということを意味している。生産および消費は≪家族制集団≫を単位として行われる。「家族制生産様式」は次の6点で，他の生産様式と区別される。

1. 分業　家族内における性による分業によって主要な生計活動が行われる。

2. 道具　単純なテクノロジー。従ってマン・パワーが重要となる。

3. 生計のための生産　家族の構成員の必要を満たす以上の生産は行われない。反剰余の原理を宿す。

4. 所有　各家族が社会資源の分け前を，他から独立に開発する権利をもつ。

5. 共同寄託　家族内で財とサーヴィスの共同寄託と分配が行われる。これ

により家族内での連帯と，他の家族集団との差異の認識が強化される。

生産・消費・分配の相において，自立的な≪家族制集団≫から成る社会は，結果として次のような傾向を示す。

6. アナーキーと離散　生産，分配，消費において自己完結的な傾向をもつ家族制集団は，相互に離散的な傾向をもつ。

このように，「家族制生産様式」はそれ自体では社会の統合を用意するものであるとはいえない。逆にそれぞれの家族制集団は離散的であるために，社会は分裂的な傾向を示すのである。こうした離散的な傾向を乗り越えるものとして，家族制集団の上にかぶせられるものが，サーリンズによれば，親族システムと政治システムである。親族システムは相互扶助的な関係であり，一時的により労働力をもつ家族にたいして，他の家族のために余剰生産をするように圧力をかける。政治システムは，親族性機能の徹底化として現れる。政治システムが親族システムと異なるのは，関係をもつ当事者間に上下の身分の差をつけることにある。すなわち「首長」と「民衆」という関係である。サーリンズは，「首長」と「民衆」の関係は，「余剰生産物」の流れによって基礎づけられていると考える。「民衆」から「首長」のもとに集められた生産物は，再分配のプロセスにおいて再びその一部が「民衆」に分配され，「首長」はイデオロギー的に「与え手」の姿をとる。このように「家族制生産様式」をとる民族集団が社会的統合を実現するさいには，親族システムにしろ政治システムにしろ，各世帯に余剰生産を強いて，その生産物を循環させる装置が必要とされるのである。

現在のベンチョ社会のありかたを「家族制生産様式」の特徴である上記の6点との関連で考察してみると，次のようになる。

1. 生業活動の主要な労働力は世帯内のメンバーに依存している。そしてその内部では男女の性による分業が見られる。すなわち世帯が一つの質的な生産単位となっている。また穀物の収穫時に組織される共同労働ダブも，少数の隣

人および血縁親族という比較的狭い社会関係にある人々から構成されている。

2. 農耕活動に用いられる道具はクワやガジェラとよばれる多目的的なおおぶりの山刀程度であり，生産性の多寡は道具の所有よりもむしろそれを用いるマン・パワーにかかっている。

3. 生産性自体についていえば，計算から示したように，ベンチョの多くの世帯は自らの生計の維持にあわせたレヴェルで生産しているように思われる。

4. ベンチョの生業において重要な資源は土地である。世帯は各々1ヘクタール程度の耕作地を所有しており，その利用のしかたやそこからあがる生産物の領有，処分について独自に決定する。また開墾されていない土地は，そこを最初に開墾したものが用いる。

5. 生産物の分配と消費は，日常的には世帯内で行われる。

6. 現在のベンチョ社会は，こうした世帯を有機的に結びつける制度を欠いている。むしろ婚資をめぐる姻族間の対立にみられるように，アノミー的な状況さえみられる。

このように，現在のベンチョ社会は，サーリンズの呈示した「家族制生産様式」の諸特徴を現している。

それにたいして革命以前のベンチョ社会は，交換の中心としての強力な「首長」によって統合され，その根底にある離散性は矯められていた。そしてこのような統合は，世帯生計のレヴェルでみるなら余剰な生産によって維持されていたものと思われる。第3章で述べたように，婚資としての牛を得るために少年は，自分の食べるよりもはるかに多くの畑を耕作せねばならない。

革命以前のベンチョ社会の生産様式の特徴は，先に述べた現在のベンチョ社会にみられる生産様式と，以下のように 1.労働，3.生産性，4.資源の領有，6.社会の統合の4点で異なっていたものと思われる。

1. 労働は世帯内の性による分業に依存していた。しかし共同労働は姻族を含む大規模なものだった。

3. 生産は世帯の生計の維持を越えたレヴェルで行われた。余剰生産物は，供犠獣として「首長」に捧げられたり，婚資として世帯間を循環した。

4. 「首長」の領土内の土地の所有権は「首長」のものだった。各世帯は「首長」の許しを得て耕作地を開墾し，その「使用権」を得た。このことは「首長」を中心とする交換のシステムに内属することを意味した。

5. 社会は「首長」を中心とする交換のシステムによって統合されていた。

サーリンズの言うように，「家族制生産様式」をとる生業形態から社会の離散的な傾向が導きだされるとするならば（そして現在のベンチョ社会はまさにそうした傾向を示しているのだが），革命以前の「首長制」は婚資の流通と姻族間の紐帯の強化によって，生業形態の課す離散性という条件を矯め，社会の統合を実現していたと言えるだろう。現在のベンチョ社会の様相は，相反するふたつの力（「首長」による婚資の統制と社会の統合／世帯単位の自給的な生計活動と社会の離散性）のうち，かつて優越していた前者が消滅したために，それによって抑圧されていた後者が発現してきたのだと解釈できるのではなかろうか。

7. むすびにかえて

ランゲは，ベンチョをふくむギミラ諸民族についてのモノグラフの副題を，「消えゆく文化の面影」としている。ランゲの調査はエチオピア革命の前に行われたのだけれど，ベンチョはすでに1900年台初頭からアムハラの侵略と奴隷狩にあい，その社会の存亡の危機にたたされていた。そして革命。土着の「首長」たちは処刑され，伝統的な宗教である“カ”や“ミャンゲ”への信仰も弾圧されている。ベンチョ社会の統合の要が「首長」であり，その「首長」権威を支えていたのが人々の“カ”や“ミャンゲ”への信仰であったことを考えるならば，ベンチョの文化は，その社会の存立契機そのものにあたる部分を剝奪

されてしまったといえよう。

このように，革命後のベンチョ社会の変容は決して内在的な力によるものではなく，外部社会からの強制力によるものである。人々は表面上はこうした変化を甘んじて受け入れているようにみえる。もちろん政府の監視をのがれて，秘密裡に“カ”や“ミャンゲ”への信仰は行われている。けれどももはや，今世紀の初頭に，エチオピア帝国の侵略にたいして「首長」たちが示したような抵抗は見ることができない。

筆者の滞在したゴマルでは，近いうちに，計画的に作られた集村に人々を移住させる「村落化計画（villagization）」が実施される予定だという。おそらくこれによって，生業形態も含んださらなる変化が生ずるだろう。（集村化によって相互監視体制が形成され，“カ”や“ミャンゲ”への信仰は根絶されるだろうとあるインフォーマントは言った）。

ベンチョ社会は，そこで生きる人々の意志にかかわりなく，急激に変形され，国家の中の均質な一部分にされようとしている。今回の調査は，ランゲのように言うならば，消えゆく文化や社会の面影を見ることのできる，最後のチャンスであったのかもしれない。

参 考 文 献

Bender, M. Lionel ed., 1976; The Non-Semitic Languages in Ethiopia. African Studies Center, Michigan State University.

Butzer, Karl, W., 1971; Recent History of an Ethiopian Delta. The University of Chicago, Department of Geography, Research Paper No. 136.

Daniel Gamaschu, 1977; Aspects of Climate and Water Budget in Ethiopia. Addis Ababa University Press.

Fleming, Harold, C., 1976; Omotic Overview. In Bender (ed.)

Lange, Werner, 1975; Gimira: Remnants of a Vanishing Culture. Inaugural-dissertation zur Erlangung des Grades eines Doktors der Philosophie im Fachbereich Geschichtswissenschaften der Johann Wolfgang Goethe-Universität zu Frankfurt/Main.

Sahlins, Marshal, 1972; Stone Age Economics, Aldine, Chicago.
(山内　訳「石器時代の経済学」1984年)

本稿のもととなった調査は，文部省科学研究費補助金による昭和61年度海外学術調査「乾燥アフリカにおける農・牧社会の比較研究—北東アフリカを中心に—」(代表　国立民族学博物館 福井勝義) の一環として行われた。福井氏をはじめとする調査隊のメンバーには，様々な励ましや刺激をいただいた。エチオピアでは，日本大使館の皆さん，青年海外協力隊の皆さんをはじめとする在エチオピアの日本人の皆さんに，物心両面におけるご援助をいただいた。ここに謝して記します。またアジスアベバ大学エチオピア研究所のスタッフの皆さんには，現地調査に必要な様々な許可についての便宜をはかっていただいた。

Gezahegn Petros 氏にはエチオピア文化省からカウンターパートとして調査に同行していただき，様々な面でご助力いただいた。

最後に通訳をしていただいた Tllint Koinz 氏をはじめとするベンチョの人々に，我々を暖かく迎えてくださったことを感謝いたします。

The Bencho
A Report on its Subsistence System and its Social Change

Yukio Miyawaki

The Bencho is a sedentary agricultural people in the south-western part of Ethiopia. Their territory is located around 7°N 35°E, at the altitude more than 1500m. Their language is classified into Omotic by Fleming [1976]. As other ethnic groups in the south-western part of Ethiopia, the Bencho is called by the derogatory term "shankilla", which means "black people", by the Amhara. Their territory is relatively humid. The annual precipitation is about 1400mm~1800mm. The original vegetation of the land was highland forest. However, most part of the land is now cleared and under cultivation.

Anthropological research which has been done about the Bencho until now is rare. The most informative one is "GIMIRA : REMNANTS OF A VANISHING CULTURE" written by Wener J. Lange [1975], in which we can find useful informations about the religion of the Bencho which was investigated just before the revolution in 1974. However, information about subsistence activities or the social structure of the Bencho is scarce in the book.

I made a research about the subsistence system and the social structure of the Bencho from November 1986 to February 1987.

The aim of this paper is to present a brief picture of the subsistence system of the Bencho and its socio-cultural change. In the concluding section, I will analyze the socio-cultural change by the concept of "the domestic mode of production" presented by Marshall Sahlins [1972].